

# 繪本に望む

附屬幼稚園 安村 ふさ

此方では「讀んで」と寄つて來、彼方では一心に拾ひ讀みする。梅雨時分の幼稚園にはかうした光景が屢々見られる。先刻までは天にも響けと喚聲をあげて兵隊ごっこをしてゐたことも達が、此は又鮮かな轉身ぶりである。そして保育室の一隅はしんみりとなり、すりよせた頭の廻りには、ほのぼのとした温かさがとりまく。あの元氣なこども達を此程までに惹きつけ、靜かにさせる繪本、それは此の戦時下にどの様な姿を呈してゐるか、此から少し考へたい。

戦争前まではよみものはこどもの世界に歩調を合せてゐた。併し今ではこども達がよみものに歩調を合せる様にしむけられてゐる。即ち戦時下のこどもとして認識すべしと觀じた方面へ強力に引き寄せられてゐるのである。

此の頃出版されるよみもの——幼稚園期に於ては主として繪本——は勿論、戦争意

識の昂揚に資せんとしてゐるのが大部分である。其の中で更に分けてみれば、大ざつぱらにいつて、一、時局認識に資すべき愛國的、科學的のもの、二、自然科學等の觀察的のもの、三、良き躰に資すべき教育的意圖の明瞭なもの、四、物語風の情操的なもの、と分けられると思ふ。そして勿論時局認識に資すべきものが直接戦争意識の昂揚に役立つ爲に最も多い現状である。

扱こども達はどういふものを好むかといふと、私が自分の受持つ二年保育の年長兒二十數名について調べた所では、一、四に屬するものが略々半ばし、他はほんの二、三人といふ結果が出た。そして一は殆ど男兒、四は殆ど女兒と一部の男兒といふ次第であつた。

又父兄は今の繪本をどうみてゐるか、將來どうありたいと望むかを調べてみると、先づ本が仲々手に入らないと誰もがいふ。

その結果見つけ次第に讀解出來さうなものは大抵買ひ與へる、といふ態度と、全然手に入らぬものとして兄姉の讀み古した戦争以前のものを與へ新しくは殆ど買ひ與へないとの二つに分れる。扱求め得たものをよく検討すると、時局的のものが殆どで詩的なものは少い、紙質の悪いのは止むを得ないがこどもの目を喜ばす色彩のよいものが少いといふ。で將來は、各社共よく聯絡をとつて一貫した方針の下に發行して欲しい、種類は少くとも冊数を多く出版し、購入し易くして欲しい。時局的なものも、觀察的のものも、幼兒の共感を起し興味を覺えさせる様、もつと工夫して欲しい、といふ希望であつた。

以上の他に私一個人の考へを蛇足的に書く。先づ繪本は幼兒にとつて最も重要な環境の一つである事を誰もがしつかり肚に入れて置き、その及ぼす影響の大なる事に深く思ひを致すべきだと思ふ。そして繪本は又文のある所が生命であるから、單に説明丈に終つてゐる様な無味乾燥のものでなく、繪文一體のものたる事が望ましい。基底には教育的のものを藏してゐても、露骨

に表現する事なく、和やかな愛情を充滿させてゐる事が必要であらう。そしてあくまでもやさしく、親しみ深く、幼児の共感を引くものであつて欲しい。はつきりした線色彩、出来る丈の保存に耐へるよい紙質、容易に買へる丈の量、戦時下には叶はぬ望みかも知れないが、戦時下なればこそ尙望みたい。戦局が苛烈になるに従つて休園する所が多くなると思ふが、そんな時、お話

## お 話 二 つ

附屬幼稚園 志村貞子

子供たちはお話が大好きです。お家ではお母さんに、またお父さんに、そして身近にゐる誰彼に、幼稚園に來ては先生に、「何かお話ししてよ」とねだるに違ひありません。そしてこの子供達は次から次へとお話を求めて飽くことをしらない心の持主なのです。知つてゐるお話はみんな話してしまひました。いろ／＼本を讀んで話してやりました。もう種切れ、それでも子供は後から後から求めてやみません。「お母さん

に飢ゑたことも違は多忙な母親の手を省く爲にも、繪本に向ふ事になるだらう。さうした場合幼児の氣持を失望させない丈の、否もつと積極的に幼児の生活を建設的に導く様な健康なものが欲しい。清純な情操を養ふもの、純真な愛國心を昂揚させるもの、科學精神の芽生へを培ふもの、何れにも和やかな愛情を充滿させ幼児をとりよく環境に明るい希望を持たせたいと思ふ。

の知つてゐるお話はみんなしてあげたのよ、もうおしまひ」そんなにお話、お話つてうるさい子ねえ。こんなことがいへるでせうか。あの眼を輝かして、耳を澄ましてきゝ入る子供たちに。またそんなことをいはれたら子供たちはどんなにかつかりする事だせう。すく／＼とお話で育つた心がしなびてしまはないとも限りません。私共は何とか子供達の心の食物になるお話の種を探さなければなりません。お話の種といふ

と私共はすぐ何か手取早くお話を書いた本はないかと探します。しかし此の頃は本もなか／＼手に入りませんし、殊に幼児向のお話の本は極く少いやうです。そこで止むを得ずお話の自給自足、外に向つてあれこれと探し求めてゐたお話をお母様自身、先生自身が作つてみようといふことにならなければなりません。さてさう思ひきめて廻りを見廻してみると何とお話の世界にとりまかれてゐる事に氣がつかました。子供達にとつて親しいものは何でも私共が眼を向けさへすればよるこんでお話の材料を提供してくれてゐます。そしてこんなにも子供たちが喜んでくれるものと此方までが嬉しくなるのです。次に一つの例をあげてみます。家庭菜園のカボチャ、この頃の人氣者で子供達にも親しいものです。植木鉢に蒔いた種子から可愛い、双葉が生まれました。そこで移植をしながらお母さんはこんなお話を坊やにしました。

カボチャのお引越

坊や、カボチャがするぶん大きくなつたわね、植木鉢のお家じや狭くて窮屈さうねお引越をしませう。お日様のよくあたる坊